
和やか日和～時期を逃せばただの人～

月&陽

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

和やか日和〜時期を逃せばただの人〜

【Nコード】

N0779T

【作者名】

月&陽

【あらすじ】

このお話は、ある方の発案で、何となく書き始めたものです。軸となっているのは、カリスマ漫画の北斗の拳。世紀末が訪れなかったら、彼等はどうなるのだろうか??? そんな仮想世界を書いた作品になります。

頭をからっぽにして、気楽に読んで下さい (^ー・) . .

オープニング

1999年、ノストラダムスの人類滅亡の予言も外れ、世界は核の炎にも包まれなかった。

相変わらずの内戦や民族紛争は続くものの、人類は仮初の平和の中、したたかに存続を続けている。

地球環境は破壊され、絶滅危惧種の種族は存続の危機に追いやり、自然は悲鳴を上げているものの、自分達が幸せで暮らしやすければよいと考えるエゴイズとな人間達は、そんな彼等を見捨て、今日も滅亡へと続く豊かさを謳歌していた。

この日本では、政権が交代したものの、経済は益々悪化の路を辿り、私腹を肥やす一部の政治家を始めとする特権階級を除き、善良な人々は、不景気と増税に苦しめられている。

かつて、最強と謳われた暗殺拳の使い手達は、世紀末が訪れなかった為、自らの存在価値を失い、それぞれが路頭に迷っていた。

彼等は、自身が活躍できる混乱の時代を待ちかまえながらも、平和な世界にどっぷりと肩までつかり込み、民間人に紛れ商売人となり、新たな道を歩み始める。

この物語は、敵を悪党から不景気に変え、懸命に立ち向かって行く、漢達の熱い闘いの記憶だったり、そうでなかったりする。

最強のコンビニに店員・ラオウ現る

時は平成。

場所は日本のある場所。

駅から少し離れた商店街に面した場所に、一軒のコンビニエンスストアが立っていた。

店の名前は、にこにこマート北斗。

景気が良かった時には、何店舗かを地元で展開し、師父と仰ぐリユウケンの指導の元、長兄・ラオウ、次兄・トキ、三男・ジャキ、末子・ケンシロウの四兄弟で、一店舗ずつ店長を務め経営に参加していたが、冷え切った日本経済の不況に押され、今はこの本店一店舗のみがかるうじて生き残り、彼等はここに身を寄せ合っていた。

「うゝ、寒い寒い」

コートの襟を立てながら、中年の男がにこにこマート北斗の門をくぐって来る。

男はこの辺りの保険の外交を担当する男だが、以前気まぐれで店に立ち寄った時、カウンターの中に美女がいた事を思い出し、近くを通りかかったついでに、昼飯を買いにコンビニに立ち寄ってみたのだ。

店の中には、昼の時間だというのに、客は男の一人しか見当たらなかった。

レジにも人の姿がない。

店の中に人気は一切なく、有線から適量のポリリウムで音楽が流されているのみである。

「不用心な店だな・・・。万引きでも入ったらどうする気だよ」

不思議には思ったものの、急いで次の営業に回りたい為、男は惣菜コーナーに真っ直ぐ足を向ける。

「ああ、これだよ。これが美味かったんだ!」

商品ケースの中に陳列された、きんぴらゴボウや肉じゃが、おか

らが少量詰められたパックを手に取り、おにぎり2個、カップの味噌汁と一緒にカゴの中に詰め、男は会計のレジへと向かう。

郷里を離れ、都会で生活する様になってから、男の食事は外食が多く不規則なものになっていたが、以前ここで購入した総菜は、どれもが優しい味で、しばらく会っていない母を思い出すものばかりだった。

そんな惣菜を食す事も男の楽しみの一つではあるが、一番の目的は、以前この店に訪れた際、優しい笑顔で温かく出迎えてくれた、名も知らぬ美女の存在だった。

今日こそは、名前くらい聞いてみよう。

あわよくばメアドまでゲット出来たなら・・・

にやけた顔を見られない様に、男は俯いたままクールに決め、カゴをレジカウントーの上に乗せる。

すると、客が来た気配を感じ取ったのか、店の奥から誰かが現れる気配がし、男の前でぴたりと止まる。

「・・・？」

が、現れた人物は、何時まで経っても会計をする気配もなく、ただ黙って立っているのみ。

「おいっ！黙って突っ立ってないで、さっさと会計を済ませてくれよ！それと、お客様が来たら、まずはいらっしやいませだろ？全く礼儀がなっていない店員だ・・・な・・・」

自分を覆う異様なシルエットの広さから、現れたのが男の店員だと判断し、半ば切れた男が叫ぶが、その声は途中から段々と小さくなっていく。

そこにいたのは、天井まで背が届きそうな、筋肉隆々の浅黒く日焼けした、目つきの悪い男だった。眉間にはしわが深く寄り、ピンク色のにこにこマート北斗と書かれたエプロンがパツパツに後ろに引っ張られ、今にも引き裂かれそうに悲鳴を上げていた。

この男の名はラオウ。

かつては、最強の暗殺拳と恐れられた、北斗神拳を極めし、北斗

四兄弟の長兄である。

こんな奴がいたから、店には客が一人もいなかったんだ……いや、それどころか、こんな店で万引きをしようものなら、命が幾つあっても足りはしないだろう……

昼食時にも関わらず、店に自分以外の客がいなかった理由を、男は今更ながら理解し、こんな店に来てしまった事を激しく後悔する。
「……………」

目の前の客である男を無視し、ラオウは突っ立ったまま岩の様にピクリとも動こうとしない。

「……お前、聞こえているのか？ 頭ぐらい下げたらどうなんだ！ それと、早く会計を済ませてくれよ！」

最初は、ラオウの発する異様なオーラに押されたものの、勢いを取り戻した男が、時計の針を気にしながら、ラオウに素早く会計を済ませる様に促す。

「ぬう……………」

男をギリリと見下ろした後で、ラオウはエプロンのポケットから何故か入っていた煉瓦を取り出し、無造作に握る。

バキリ！という鈍い音がし、煉瓦は無残にも粉々に砕け散っていた。
「ひい……………」

「我は帝王なり！ 故に我は、引かぬ、媚びぬ、退かぬ！」

ラオウは言い放った後で、顎でバーコードリーダーを男に指し示す。

「はっ、はいっ！ やらせて頂きます！」

ラオウの真意を理解し、男は客でありながら、自らバーコードリーダーで商品を読み取り、会計を済ます。

「こっ、これで……。お釣りは結構です！」

買った商品を自ら袋に詰め、千円札をレジカウンターの上に置き、男は逃げるようにその場を立ち去ろうとする。

「待て」

そんな男を、今度は別の男の声が呼び止める。

振り返ると、そこにはラオウよりは数段優しい顔立ちをした、同じくピンクのエプロンをした男が立っていた。身長はそこまで高くはないが、ティーシャツから覗く逞しい腕が、彼もまたマッチョである事を物語っている。

この男の名はケンシロウ。北斗四兄弟の末子である。

「・・・なっ、何か？」

「お釣りを忘れている。それに、味噌汁にお湯を入れなければ飲む事も出来ない。貸してみる」

ケンシロウは、男の袋の中から味噌汁を取り出しお湯を注ぎ、次いでラオウのでかい体を押しつけ、男が受け取る筈だったお釣りを取り出し、両方を男に手渡す。

「待って！怖い思いをさせてごめんなさい。これ、お詫びのしるしです。ラオウは愛想は悪いけど、気難しいだけで悪い人じゃないんです」

揚げたてのコロッケの包みを手に、一人の美女が姿を現し、男に頭を下げながら袋の中に商品を滑り込ませます。

腰までのサラサラのストレートの髪に、澄んだ美しい瞳と整った美貌。スレンダーに引き締まりながらも、出るところは出て、引込むところは引込んだ、ナイスボディ。

彼女の名はユリア。

男がもう一度会いたいと思っていた美女だった。

あれは、愛想が悪いとかいうレベルじゃないと思うが・・・

ユリアの言葉に腹の中で突っ込みを入れ、恐る恐る男がラオウを見ると、相変わらずのしかめっ面でこちらを睨んでいた。

蛇に睨まれた蛙の様に、男はラオウから視線を反らせなくなる。

「これに懲りず、また来て下さい」

怯える男の視線を自分に戻し、ユリアが微笑む。

その陽だまりの様な優しい笑顔に、男の中から恐怖心がゆっくりと溶けて行く。

「君の名前は？」

「ユリアです」

「ユリア、いい名前だ……。また来ます」

恍惚の表情で、男は店の外へと姿を消して行く。

どうやら、ラオウに与えられた恐怖は、ユリアによって完全に拭いさられたらしい。

「ラオウ、いい加減にしないか」

客が帰った後の店内で、ケンシロウがラオウを睨む。

「ふん！帝王は、誰にも跪かぬものだ。もう少して、小銭が手に入つたものを、邪魔しおつて」

小銭を入れそこなつたピンクの豚の貯金箱を寂しそうに振り、ラオウが拗ねた様に咳く。

「商いとは、誠実であるべきものだ。客には、誠意を持って接しろ。それに、返すべき釣銭を着服するなど言語道断」

「あれは、向こうが献上すると言つたものだ。それに、今日はまだ店の備品は破壊してはいない」

ケンシロウをギロリと睨んだ後で、ラオウは店の奥へと消えて行く。

「この不景気に困つたものだ……。まあ、備品を壊さなかつただけ、良しとするしかないな」

そんな長兄の背中を、ケンシロウが呆れた様に見送る。

「ケン、ごめんなさい。私がお昼の休憩を頂いていたから、ラオウが代わりに出てきてくれたと思うの」

「気にするな、ユリア。お前は悪くない。今度からは休憩に入る時は、俺かトキに声をかけてくれ。くれぐれも、愛想が最悪なラオウと、手癖が悪いジャキは避けてほしい」

「わかつたわ」

ケンシロウの言葉に、ユリアが頷く。

そこに、昼ご飯を買いに来た客が現れた為、ユリアはレジカウンターの向へ、ケンシロウは商品の管理と陳列業務へと別れて行く。

ここにニマート北斗に稀に現れるラオウに出会った者は、恐怖に襲われるというお話でした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0779t/>

和やか日和～時期を逃せばただの人～

2011年5月15日15時55分発行